

学生の持続可能な課外活動に関する研究

—民族音楽サークル「インタムシカ」の事例より—

Study of the Sustainable Extracurricular Activities — From the Case of ‘*Intamusica*’, the Ethnic Music Club of Tokai University (Sapporo Campus) —

沖野 慎二¹

Shinji Okino²

要 旨

本稿では、本学の学生民族音楽サークル「インタムシカ」の20年にも及んだ活動を例に、課外活動の運営上の問題点や活動が上昇／衰退した要因とその仕組みを「サーキットモデル」を用いてそれらの解明を試み、自律的で持続可能な活動を創出するための条件について考察した。結果として、「サーキットモデル」はそれらを説明するのに有効であることがわかった。しかし、他の事例については今後のさらなる研究・検証が必要と思われる。

Abstract

The author, in this article, shows the management problems, factors and mechanisms of the extracurricular activity, rising up or falling down, from the case of “*Intamusica*”, the student’s ethnic music club of Tokai University (Sapporo Campus), over 20 years, and also discussed the factors of creating its autonomous and sustainable activity, quoting and applying the “Circuit Model”. The result shows that this model is useful for explaining these activities. In addition, the author states that it is need to inspect the other case.

キーワード： 課外活動, 民族音楽, サーキットモデル, 持続可能性

Keywords: Extracurricular Activity, Ethnic Music, Circuit Model, Sustainability

1. はじめに

筆者は以前本誌上において2回にわたり、1989年から2010年まで約20年間の活動後、その活動を停止、その後廃部となった本学の学生民族音楽サークル「インタムシカ」の活動報告〔沖野2010, 2011〕をし、部長教員（顧問）の立場から、課外活動が活性化される時、また、停滞・衰退する時の条件／要因についても考察した。しかしながら、それらの報告はサークルの歴史の後半約10年間における筆者の経験に基づいたものとはいえ、サークル活動の長所や反省点

¹ 東海大学国際文化学部地域創造学科, 005-8601 札幌市南区南沢 5 条 1 丁目 1-1 ; E-mail: occhi@tspirit.tokai-u.jp

² Department of Community Development, School of International Cultural Relations, Sapporo Campus, Tokai University, 5-1-1-1 Minamisawa, Minami-ku, Sapporo 005-8601, Japan; E-mail: occhi@tspirit.tokai-u.jp

などについて単に羅列的に記述，考察したものにすぎず，サークル活動における様々な条件や要因等についてある程度の説明はできたが，理論的枠組みに沿って解明したものではなかった。

本稿では地域振興に関わる自立型マネジメント実現のためのモデルとして近年注目されている「サーキットモデル」(後述)を援用することで彼らの活動の長所や問題点を考察し，将来新たなクラブやサークルを立ち上げ，学内外で持続可能な活動を創出するためには何が必要か，また，その際の注意点は何かについて議論するつもりである。

ここで「サーキットモデル」を援用する理由(動機，背景)について説明しておきたい。

筆者は2006年度国立民族学博物館共同研究『ヘリテージ(遺産)の所有と利用に関する観光文明学的研究』第4回共同研究会(2006年11月25日～26日)において，インタムシカの活動を題材に「民族音楽・楽器の学習・継承の試み～北海道における学生と地域の交流活動から」というテーマで講演(研究報告)と共同討議・質疑応答を行った際，会場の参加者の一人，森重昌之氏(株式会社計画情報研究所研究員，当時)から「インタムシカの活動はサーキットモデルで説明が可能ではないだろうか。」との趣旨の提言を筆者に与えて下さったことが本稿執筆の最大の動機である。

しかしながら，森重氏および「サーキットモデル」の元々の考案者である敷田麻実氏ほかの研究者が対象としているのは主に地域活性化や町づくり，エコツーリズムなどであり，教育機関内の学生/生徒の課外活動を対象とした事例研究は筆者の知る限りにおいて他に見当たらない。また，敷田氏らの実践研究ではいわば「成功例」が多く見受けられ，本稿筆者が対象とするインタムシカのように活動がいったん上昇(成功)した後，下降(失敗)，その結果消滅したクラブ活動のような事例研究は見られない。したがって，前述のように森重氏が筆者に助言したことが果たして適用可能かどうかを検証する必要があると思われる。

以上の理由から本稿執筆に至ったことをまずここに申し述べておきたい。

2. サーキットモデルについて

「サーキットモデル」に関する研究は敷田・森重を中心に主に「地域活性化」のための基本，あるいは指南となりうるモデルとして様々な実践を伴って現在も行われているが，それらの詳細については本稿文末の参考文献表をご参照いただきたい。

敷田らによれば，サーキットモデルの基本構造は「店を開く(opening store)」，「ネットワークの形成(networking)」，「成果の発信(presentation)」，「イメージの形成(evaluation)」の4つのフェーズと，「学習」のコアで構成され[敷田・森重 2003a, p.3]，その全体構造は数字の8の字を真横にした「∞」(「無限大」を表す記号)のような比較的単純なものであり，「サーキットモデル」と言われる所以は正にレーシングカーが走るサーキットに類似するその構造にある。

敷田らは様々な実践研究から，「サーキットモデル」の多くのヴァリエーションを考案しているが，基本構造はすべて同じである([敷田・森重 2003b, p.132]，[敷田・森重 2006b, p.252]，[敷田(編著)，森重・高木・宮本(著) 2008, p.102]，[敷田 2013c]など)。本稿ではこれらの数多くのサーキットモデルの中で，インタムシカの活動が必ずしもエコツーリズムやNPO活動など観光や地域マネジメントを最初から意図して行ったものではないという理由から，彼らの活動を説明するのに一番ふさわしいモデルとして最も基本的と考えられる「活動促進のためのサーキットモデル」[敷田 2013c]を暫定的に選定した。このモデルについて前述の構成

と全体構造の説明を遵守しながらその仕組みを以下に説明する。なお、筆者は本稿を読まれる方にサーキットモデルを文章からそのイメージを想像していただくことを期待しているため、あえて図は提示しない。どうしてもイメージできない、または全体像が知りたい方は本文末の参考文献表の敷田らの研究をご参照いただきたい（特に敷田の Web サイトは「サーキットモデル」という用語でインターネット検索により容易にアクセス可能である）。

まず、∞のサーキット構造の中で曲線の交差点（中心部）は前述の「学習」のコア（同モデルでは「学習コア」）にあたり、そこから右半分の曲線では反時計回りに進行、中心部の「学習コア」を通過した後、左半分では時計回りに進行し、再び「学習コア」を通過し、繰り返し循環する。ただし、この「再び学習コアを通過」した地点は最初に反時計回りに通過した地点ではなく、(理想的には)一段上の位置に上昇している。すなわち、「サーキットがスパイラル状に上昇し」〔敷田・森重 2003b, p.132〕、これは活動がより一層活性化していくことを意味している。

では、前述の各フェーズがサーキット構造の中でそれぞれどのような意味を持ち、どこに位置づけられるか、「活動促進のためのサーキットモデル」に限定して次に説明したい。

- (1) フェーズ①：表明（「店を開く」）＝活動に参加する人が知識や情報を出し合う（曲線右半分の下方に位置）。ここでは「よそ者」や「よそ者のまなざし」を持つ人が「知識を開示する」ことである。次のフェーズに移行する過程で「仲間づくり」が行われ、相互のネットワークが形成される。
- (2) フェーズ②：ネットワーク（「ネットワークの形成」）＝活動にかかわる人がネットワークで結びつき、知識や情報を共有する（曲線右半分の上方に位置）。次のフェーズに移行する過程で「学習コア①」（議論や体験の中で新たな知識を想像する）を経験、すなわち学習が進む。
- (3) フェーズ③：発信（「成果の発信」）＝創った知識を具体的な成果に変え、外部に発信する（曲線左半分の下方に位置）。次のフェーズに移行する過程でこれらの成果や情報をわかりやすく「翻訳・PR」する。
- (4) フェーズ④：評価（「イメージの形成」）＝表明した知識が外部で評価され（正当化され）、良いイメージが形成される（曲線左半分の上方に位置）。次のフェーズに移行する過程で「学習コア②」（外部から新たな参加者と知識を呼び込む）を経験し、外部からの賛同者が持つ知識を加えながら一段高い次のサイクルに入っていく（一段高いレベルのフェーズ1に戻る）。このサイクルを繰り返すことによって、活動がスパイラル状に上昇していく。

以上が敷田によるモデル〔敷田 2013c〕と敷田・森重によるモデル〔敷田・森重 2003a, pp.3-4, および同 2006b, pp.252-254〕を参考に一部加筆しながら文章のみで説明したものである。

では、この「活動促進のためのサーキットモデル」でインタムシカの活動が活性化した際の条件や、活動の「サーキット」が回らなくなった、または上昇できなくなった原因を説明できるだろうか。次章ではそのことについて解明したい。

3. 結果：「インタムシカ」の活動に「サーキットモデル」を適用する

インタムシカの活動の歴史とその内容については既に筆者が報告〔沖野 2010 および 2011〕しているため、読者はそちらも併せてご覧になっていただきたい（本誌 Web サイトより閲覧およびダウンロードが可能である）。

さて、インタムシカが創設された 1989 年から筆者が本学に着任しインタムシカの顧問となった 1999 年以前の活動状況がどのようなものであったか、ここであらためて振り返ってみたい。

3.1 前半（1989～1998 年）の活動

インタムシカの創設者であった前顧問は音楽哲学や民族音楽学（音楽人類学）の専門家であり、本学在任時は防音壁完備の M1021 教室（メッセ 11 階）に備え付けのグランドピアノ（図 1）を用い、同教室において授業を行うこともあったとのことである³。また、インタムシカ発足当時の本学には吹奏楽部はなく、インタムシカ自体もいわば「未分化」の状態であり、様々な音楽や楽器を取り扱いながら吹奏楽部としての役目も果たしていたようである。現在もその名残としてトランペット 2 本（図 2）や吹奏楽用の楽譜類（図 3）が（現在は M1020 教室に）保存され、それらの楽譜類には「北海道東海大学 音楽倶楽部 インタ・ムシカ」のシール（図 4）が貼付けられている。筆者のその後の聞き取り調査から、インタムシカ発足の 1～2 年後、1990 年か 1991 年頃には本学後援会の援助による約 600 万円の予算のもと吹奏楽部が発足したことが関係者の証言より判明した⁴。この時、吹奏楽部はインタムシカとは全く別に新規に発足したものなのか、インタムシカの部員のうち吹奏楽担当者が独立して発足したものなのかは不明である。同時に前述のトランペットや吹奏楽用楽譜類が吹奏楽部に引き継がれないまま現在もインタムシカの所蔵品の一部として残されていることも謎である。仮に当時の部員のうち吹奏楽担当者が新規に発足した吹奏楽部に転部したとすれば、その後筆者が着任するまでの期間に起きた部員の減少と活動の停滞・衰退の原因がある程度説明できるように思われるが、吹奏楽用の楽器と楽譜が残された理由を説明することはできない。単に新規発足の吹奏楽部に移管し忘れただけだったのか、あるいはトランペットを担当し楽譜を使用していた一部の部員の退部（または退学や卒業）の時と吹奏楽部の発足時期とが偶然重なったことでそれまで所属していたインタムシカにそのまま残して置いていったのかもしれない。

一方、いつ購入（または寄贈）したものかその由来が不明のハンドベル・セット（図 5）が現在もあまり使用されたように見えない状態（箱と説明書付き）で残されているのも謎である。筆者が本学に着任した 1999 年当初、3 名のインタムシカ部員のうち年長者（1997 年度入学生）の証言によると、前顧問は部員たちに「何か（民族楽器を使って適当に）合わせてやってみなさいよ」と言ったそうである⁵。ハンドベル・セットは前述の（1997 年度入学の）インタムシカ部員が入学する前に既にあったとの発言を不確かながら筆者は記憶している。したがって、必ず複数名で演奏を行わなければならない性格の楽器であるハンドベル・セットが導入されたのも顧問または部員自身が特に初心者でも楽器に親しみながら複数の構成員と互いに協力し

³ 本学第 1 期卒業生・水崎禎氏より私信

⁴ 吹奏楽部発足当時の顧問である谷本一志教授（本学国際文化学部）より私信

⁵ 筆者の記憶によるものだが、情報の直接の出所は小坂みゆき氏および小泉幸子氏（いずれも本学国際文化学部卒業生、1997 年度入学生）の私信によるものである。

合うような類いの音楽の試みを意図していたと推測できなくもない。しかしながら、学生部員の「自主性」を尊重していたかのような顧問の前述の助言は残念ながら功を奏さなかったようである。筆者が本学に着任する以前の1990年代半ば頃に南米音楽（いわゆる「フォルクローレ」）に熱中したある部員は（ケーナなどの管楽器の音量の大きさを考慮して）本学屋上で練習する⁶うちにしだいに活動の場を学外に求め、卒業後も含め外の世界で活躍することになった。また、筆者が顧問を引き継いだ1999年当初、残っていたわずか3名の部員は民族楽器の活用法を（楽器演奏経験者がいたにもかかわらず）ほとんど把握していない状態であった。しかしながら、極度の部員の減少という状況の中で、3名の部員たちは1998年にインタムシカが所蔵または使用する民族楽器の紹介や学内外の演奏会の音楽情報の普及手段としてA4版1枚のニューズレター（図6）を手書きで作成・印刷・配布するなど小規模ながらも重要な部活動を開始したことは特筆すべきことである。なお、ニューズレターは1998年11月5日発行の第1号に始まり、2005年6月13日発行の第20号で終了した。図6はそのすべてを集めたものである。

では、筆者が顧問に就任する1999年以前のインタムシカの活動の問題点は一体何だったのだろうか。何が原因で活動が衰退していったのだろうか。確かに吹奏楽部が新規に発足したことも部員構成に影響を与えた要因の一つとして考えられるかもしれない。しかし、筆者が気になるのは前顧問が部員たちの自主性に任せていたという点である。この点についてサーキットモデルを援用して説明すれば、まず、前顧問は「フェーズ①」の新たな知識を供給する「よそ者」にはなり得なかったということである。インタムシカが発足した時点において前顧問は新入生または新入部員を受け入れる立場であったことに加え、学内における音楽学の専門家／教育者としての立場であり、そのことがむしろ部員との「パートナーシップ」（フェーズ①からフェーズ②への移行期における「仲間づくり」）の構築が困難となり、フェーズ②の「ネットワーク」形成に導くことができなかったのではないだろうか。また、前顧問自身は世界の様々な音楽に精通した音楽学の専門家ではあったが、演奏者（実践者）としての経験は乏しかったと推測され⁷、部員たちにそれまで経験された自身の音楽体験をわかりやすい形で「翻訳」（フェーズ③からフェーズ④への移行期と同様）することが必ずしも実践できなかったと推測される。

サーキットモデルのフェーズ①における注意点として敷田・森重は次のように述べている〔敷田・森重 2003a, pp.4-5〕。

このフェーズで重要なことは、店を開くにはリスクを伴うということである。自己の考えを主張すると、その考え方や当事者が批判される場合がある。そのため、地域で店を開きやすくするには、地域内において多様な考えを認める工夫が必要である。

なお、エコツーリズム推進のために、その地域を1、2度訪れるだけの「専門家」が活用されることが現実には多い。しかし、彼らは店を開いたのではなく、単なる「出前」にすぎないので、フェーズ①と区別して理解しなければならない。

⁶ 本学工学部（当時）卒業生で元インタムシカ部員の森末祐司氏より私信。

⁷ 筆者は本学に着任する以前から前顧問と知己があったが、そのような話は聞いたことがない。

以上の敷田・森重の論旨を考慮すれば、当時の顧問が部員たちの自主性を尊重していた点は「専門家」として「自己主張」をあえて強固にしなかったことの裏返しだったのかもしれない。しかしながら、一般的に楽譜・譜面というものが存在することの少ない「民族音楽」を「翻訳」し、部員たちの演奏活動を促進させるためには、前顧問自身が培ってきた「専門性」をわかりやすい形で「翻訳」(フェーズ③からフェーズ④)することが必要だったのではないかと筆者は今考えている。

筆者の本学着任以前の活動が衰退した原因をサーキットモデルで説明すれば、フェーズ①～フェーズ②～学習コア①の一連の過程において、特に最初のフェーズ①の段階でうまく機能しなかったことがあげられると考えられる。

次に筆者が顧問就任後のインタムシカの活動について、サーキットモデルを援用して説明したい。



図 1



図 2



図 3



図 4



図 5



図 6

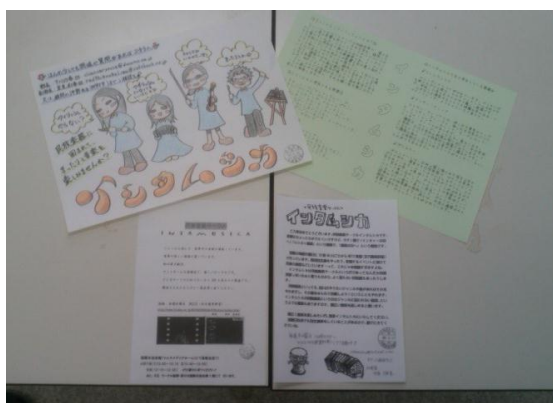


図 7



図 8

3.2 後半（1999～2010年）の活動

筆者が本学着任直後の1999年4月早々のある日、インタムシカ部員2名が筆者の研究室を訪れ、顧問就任を懇願した。その際、筆者がそれまで経験してきた音楽活動に関する情報を前顧問より既に得ていたとの話を受け、また、前顧問が他大学に異動した後一時的に顧問を務めていた教授からも同じ依頼を受け、半ば「羽交い締め」状態の中で筆者はインタムシカの顧問を引き受けることとなった。当時在籍し前年度よりニューズレターを細々と発行していた3名の部員の様子から「何か音楽活動（演奏）をやってみたい」という情熱を感じとった筆者は「これは何とかしなければならない」と考えるようになり、毎週木曜日夕方の定例会に参加し、部員と一緒に今後インタムシカをどうしていくか議論することになった。しかし、筆者の顧問就任後間もなくインタムシカの状況が一変する事態が発生した。新生2名が相次いで入部、さらに同年6月の建学祭（注：東海大学の学園祭の名称）までにさらに2名の新生が入部し、部員数は7名と急増したのである。部員数の急増に伴い特に年長者部員の音楽活動に対する情熱がさらに高まったことで、顧問である筆者も含めた部員全員が「何か一緒に演奏できないだろうか」をお互いに議論し模索するようになった。その結果、同年の建学祭において1950年代の南アフリカで大流行したポピュラー音楽の一種クウェラ1曲を演奏できるまでになったが、それに至るまでの詳細は別稿〔沖野 2010〕に譲るとして、ここまでの流れをサーキットモデルで説明すれば次のようになるとと思われる。

まず、「よそ者」である新任顧問(筆者)および極めて個性的でその後の活動する上での大きな起爆剤の役割を果たした新入部員の新規参入により、フェーズ①の「表明」(「店を開く」)が機能し始めたことである。ここで一つ重要な点を補足しておきたい。それは部員たちの音楽志向(好み)やそれまでの経験は誰一人としてお互いに共通点がなかったことである。年長者部員3名もそれぞれパンク・ロックやレゲエ(ジャマイカ)、クラブDJの経験者などであり、また、新入部員も声楽の経験者でシャンソン(フランス)やカンツォーネ(イタリア)が好きな1名、日本の70年代フォーク音楽ファンが1名、ラテン音楽ファンが1名などであった。常識的に考えればこの状態で部員一丸となって音楽活動をやっていくのは不可能であろう。しかしながら、インタムシカではお互いの音楽志向を尊重し合いながらオープンな雰囲気を常に保ちつつ情報交換しながら「仲間づくり」が進展、ネットワークが形成され(フェーズ②)、前述クウェラの音楽(偶然持ち込み、その演奏のヒントを提供したのは顧問であった筆者だが)に対し大多数の部員が共感を持ち、オリジナルの演奏スタイルを尊重しながらもインタムシカ独自の新たなスタイルを創造し(学習コア①)、建学祭において成果として初めて披露、観客に「発信」した(フェーズ③)。クウェラのオリジナルの演奏スタイルは大変難解なものであったが、試行錯誤の末、初心者や初体験者でも比較的馴染みやすいようアレンジし(「翻訳・PR」)、稚拙な演奏ながらも幸いなことに建学祭の観客はもちろん同年7月に参加した「追分ラッキーフェスティバル」〔沖野 2010, p.36 参照〕(以下、「追分フェス」と表記する)の多くの観客からも絶賛されインタムシカの良いイメージが形成された(フェーズ④)。なお、その時点でクウェラの曲目は3曲に増えていた。その後まもなく(年長者ではあったが)沖縄音楽に取り組んでいた在学生在が新入部員となり、新たな知識(沖縄音楽)を呼び込み(学習コア②)、インタムシカの活動は一段上のレベルに上昇していくことになった(スパイラルアップ)。なお、この時持ち込まれた沖縄音楽の演奏はその後廃部となるまで代々新入部員に継承されたことは特筆すべきことであり、部費で後に購入した三線(沖縄音楽などで使用される三味線)は現在も保存されている。以上が1999年度上半期の急激な活動の変化について記したが、確かにサーキットモデルで説明可能であるといえる。ただし、同年下半期は年長者2名が学園内留学のため半年不在で、その間の演奏活動はいったん休止、残った部員や顧問は外部の音楽会を(自費で)観覧するなど「学習」を行いながら年長者が前年度から始めたニューズレターの作成・印刷・発行を継続しながら、それを「呼び水」として新たな部員確保を模索した。したがって、この時点では「学習コア②」の段階にとどまり、次の(一段上の)「フェーズ①」には突入していない。

さて、翌年2000年度に入り、さらに活動がスパイラルアップされる状況が生じた。

まず、同年4月、新たに2名の新生が入部したが、この両名とも様々な楽器の演奏や音楽的センスに優れ、インタムシカがさらに「上昇」していく大きな要因の一つとなった。ここで再び(ただし一段上の)「フェーズ①」に戻り、新たな演奏曲目を増やす試みが模索され、それらの知識や情報が部員に共有された(一段上の「フェーズ②」)。その後、新たな演目として、レゲエ(ジャマイカ)、アイルランド伝統音楽(アイリッシュ・トラッド)、沖縄音楽などが追加されたが、ちょうど軌を一にしてインタムシカの部活動が北海道新聞に紹介された〔沖野 2011, p.23 参照〕ことが契機となり、札幌市内の小学校からの演奏依頼を皮切りに少なくとも2002年夏頃までに次々と様々な施設等から演奏などの依頼が殺到し、それらを次々とこなしていきながら同時に建学祭での演奏と楽器展示、前述「追分フェス」への参加やニューズレタ

一の発行も欠かさなかった。以上の2000年～2002年においては単に活動数が増加しただけでなく、その内容(演奏曲目や音楽分野の開拓などを含む)の充実という点からも概ね順調に「サーキット」がスパイラルアップしていったといえよう。2000年度に限定しても活動の「サーキット」が一体何度回り、何段階上昇したか単純に数値化はできないが、前年度に比べ飛躍的に上昇したことは確かである。

翌2001年度は、外部(地域社会)での演奏などの機会がさらに増え、一見サーキット上昇の勢いがおさまる気配がないかのように見えたが、同年7月の「追分フェス」参加後に一つの大きな転機を迎えることになった。それまで演目の多くを部員全員で演奏することに対してマンネリズムと不満を感じ、少人数ユニット(または一人)で各々好きなジャンルの演目を演奏することを希望する部員が増えたことで、一部の演目を除きそのような部員の意志を尊重し、それまでとは異なる形態の採用という新たな局面に突入した。この形態は廃部まで受け継がれ、ある程度は維持されたが、今あらためて振り返ればこの時の決定は歴史的に必ずしも正解ではなかったように思われる。年度により部員数が変動し、それほど大人数とは言いがたいインタムシカのような部活動においては、時には各ユニットの演目や活動自体の固定化につながり、時にはユニット自体が消滅することがあるなど、この2001年度の大胆な意志決定がその後の活動の衰退、しいては廃部の遠因になったものと考えられる。実際に翌2002年夏の「ひだまりの丘夏祭り」での演奏依頼を最後に(必ずしも地域活性化を意図しない音楽愛好者が集う「追分フェス」を除き)地域活性化の実践活動として学外で演奏する機会は二度と訪れることはなく⁸、その後の地域貢献的な活動は建学祭におけるステージでの演奏と楽器の展示を学内外の来客に見てもらおうという極めて消極的な活動にとどまることになった。これは「サーキット」がもはや上昇しえないことを意味している。

2002年度は音楽的技量と感覚に優れた新入生1名が入部し、卒業までリーダーシップを発揮し、後輩にそれまでインタムシカが積み重ねた「遺産」の継承を着実に実行し、新たな演目を模索するなどある程度「サーキット」を機能させたという意味でインタムシカ史上極めて重要な役割を果たしたが、同年は前年度までとは異なり、顧問(筆者)の多忙により部員の自主的運営にほとんどゆだねた形で部活動を見守っていた。このことは最初「よそ者」として参入したはずの顧問(筆者)がサーキットモデルのどのフェーズにおいても効力を発揮できなくなったことを意味している。一方、部員の多くはそれまでの「遺産」を維持するのに精一杯で新たな分野・演目を開拓するまでには至らなかったように思われる。すなわち、「サーキット」の各々の「フェーズ」は機能不全に陥りつつあり、またそれまでの上昇は逆に下降もしくは失速しつつあった。

さて、翌2003年度は6名もの新入生が入部し、その大部分が楽器演奏経験者で、また未経験者も直ちに演奏法を学習し即戦力になるなど大変意欲的で、インタムシカは再び活気を呈することになった。彼らはインタムシカにとって卒業までの大きな力となったが、問題点も見られた。それは既に2001年度頃からの新入部員がほとんど工学部(当時)の学生となったことである。2002年入部の学生も、また、2003年度入部の6名のうち5名は工学部生であった。工学部生は国際文化学部生に比べ特に高学年になると実験・実習や就職活動等で多忙となり、

⁸ 実際には特養老人ホーム他からの演奏依頼がその後も何件かあったが、お互いのスケジュールが合わず、実現には至らなかった。

部活動に参加する機会が減少していったことも部活動停滞の大きな原因の一つとなった。確かに新入部員の力量のおかげで活動は維持され、前年度に比べ活性化され、新たな演目の開拓も模索されつつあったが、彼ら自身が置かれた多忙な立場で部活動を維持していくことの困難さは誰の目から見ても明らかであった。同年、顧問は前年度の会議から解放され再び定例会に顔を出すことは多くなったが、優秀な新入生が多数入部したこともあり、適度にサポートしながらも彼らの自主性を尊重して活動を任せていた。部員数の増加に伴い「サーキット」の各々のフェーズは再び機能するようになり、それまでの「遺産」の継承も順調であったことから少なくとも見かけ上は極めて活動的に見受けられたが、「上昇」する（はずの）段階である「学習コア②」については失敗だったと評価できる。なぜなら、翌2004年以降の新入部員数は年度により変動はあったものの先細りになっていったからである。

2004年、カリキュラム改定とともに国際文化学部が改組改変となり、同学部に新たに「地域創造学科」が開設されたにもかかわらず、実際には地域活性化や既に数年前に地域貢献活動を先んじて行っていたインタムシカに関心を持つような新入生は激減、それ以前とは質の異なる学生が大量に本学に入学する傾向が見られ、部員勧誘パンフレットやポスター（図7）も功を奏さなかった。同年の新入生部員は工学部生1名のみ、翌2005年はゼロ、2006年は1名（国際文化学部生、後に同期生3名が中途入部する）、2007年度以降廃部に至るまではすべてゼロとなり、その状態で2010年インタムシカはその歴史に幕を閉じた。2004年以降の活動においてはそれ以前の「遺産」が全く継承されなかったわけではなく、最後の部員が卒業するまで少なくとも毎年、建学祭におけるステージでの演奏と楽器の展示は継続して行われていたが、あまりの人数不足のためOBや顧問がサポートしなければならないこともしばしばであった。なお、この最後の時期、建学祭の楽器展示の際には、各楽器に添えたキャプション（解説板）と世界地図（図8）に番号を記した同じ色の円形シールを貼付けることで対応させるなど、展示した民族楽器の産地を来客にわかりやすく提示する工夫を凝らしていた。

さて、2004年度～2010年度の廃部に至るまでの期間の問題点として、まず、部員数の極端な減少により「サーキット」の「フェーズ①」の段階で「店を開く」ことが激減、言い換えれば、残された少数の部員が「既に過去の蓄積をある程度継承しているのだから」という消極的な意識のもとで新たに「店を開く」必要性を感じていなかったことが推測される。このことは単にその先の「サーキット」の各フェーズや学習コアに回っていかない（行けない、または行こうとしない）ことを意味するだけでなく、部活動におけるさらに重大な問題をもはらんでおり、このことは次章で考察したい。いずれにしても、最後の部員となる同期生4名が残る以前の段階で、もはやインタムシカの活動は持続不可能で廃部は運命づけられていたといえよう。

4. 考察

前章ではインタムシカが発足し廃部となるまでのいきさつを「サーキットモデル」を援用して説明を試みたが、ここでは部員数が激減し、活動が急速に衰退していった原因をあらためて考察したい。

前章の最後で、「サーキット」の「フェーズ①」において「店を開く」ことをしなくなったことでサーキット内のその後のフェーズやコアまで回すことができなくなり、そのことが活動の衰退につながった旨を述べたが、「店を開かなかった」あるいは「店を開く必要性を感じな

くなった」ことは「サーキットモデル」の根幹をなす「オープン性」を無視あるいは放棄することであり、それは部活動自体が「内向き」、すなわち外部の人々からは「何をやっているのかわからないサークル」と見なされる一因になったと考えられる。このことは「内輪だけでやっている」、「閉じた（閉ざされた）」部活動を外部の人々に印象づけてしまい、「外部の人にわかりにくい」活動をわかりやすく「翻訳」し「発信」する作業すらマンパワーの不足と一連の作業を行う意欲が喪失したことから、インタムシカの活動の再生はもはや困難だったものと考えられる。

部員同士が常に調和を心がけ、お互いを尊重し合い、和気あいあいとした雰囲気を保ちながら活動してきたことはインタムシカ最大の長所であり、「サーキットモデル」を構成する重要な要素である「ネットワークの形成（networking）」（またはフェーズ①からフェーズ②への移行段階）において最も真価を発揮したはずであったが、その長所が部活動の危機的状況においてはむしろマイナスに作用したことを筆者は今痛感している。

学校教育、すなわち小中高および大学の部活動のほとんどは本来（活動当初）いわば「草の根」から発生したはずであったにもかかわらず、いったんクラブとしての地位を得ると、その成果（成績）により金銭および人材確保（基本的には「経験者」をそのまま入部させれば済むだけのことである）の面で保護（庇護）され、そうではないクラブに比べ有利（優位）になる傾向にあると考えられる。学校の部活動は通常「それまで特定の分野・種目・音楽（楽器）などの経験者」が入部し、同じポジションや楽器を継続担当するか、状況または部員個人の資質によっては顧問または監督、コーチ等の指導者が生徒・学生を見極めた上で別のポジションや楽器に転向させることもある。すなわち基本的には各々の生徒・学生個人がそれまで持っていた資質・才能（身体的・知的財産）を基盤として、競技大会やコンテスト、音楽コンクール等で優勝または入賞が目標・目的であるというのがわれわれの持つ一般的なイメージであろう。

一方、インタムシカの場合は「民族楽器」未経験者のみならず楽器そのものの未経験者も入部することが少なくなかった。言い換えれば、「財産ゼロ＝無一文」の状態からスタートしなければならないことがしばしばあり、仮に何らかの楽器演奏経験者でも全く異なる「構造」の（譜面の存在しない）音楽、あるいはそのような（時には演奏法が未知の）音楽性を内包した楽器に取り組まなければならないこともあった。これでは時期により演目の違いが生ずるのも当然であり、したがって、他の通常のクラブと同列に語り比較することはできない。ここが決定的な違いである。また、インタムシカの発表の場の一つでもあり、部員が毎年参加を楽しみにしていた「追分フェス」についても参加費（¥1,000/人）も、また会場（追分町）までの交通費（鉄道や自動車約2時間ほど要する）もすべて部員および顧問（本稿筆者）の自前であった。この事実をたとえ「無一文」であっても部活動は可能であった⁹ことを雄弁に物語ってくれるものである。

確かに見かけ上、学校教育現場における通常の部活動にも「サーキットモデル」を適用させることは可能かもしれないが、その「枠組み」と「種目」または「担当楽器」（構成楽器が通

⁹ 2001年度の活動実績が認められPAシステム（拡声装置一式）、エレクトリック・ベース用アンプ、マイクロフォンおよびマイクスタンドなど大量の機材を購入したが、生音を重視する音楽分野・楽曲を好んでいたことと、電気機器に無関心な部員がほとんどであったため、それらの機材は廃部に至るまで公の場でほとんど活用されることはなかった。したがって、部活動の基盤は少額の部費と楽器は個人持ち、移動は自費で主に活動していた。

常のありふれた音楽部の場合),そして「手厚い保護」を受けた部活動とインタムシカのような「無一文」から試行錯誤した結果ある程度の成果を出した部活動とを同列に語ることはできない。それは多くの部活動が自律的というよりはむしろ半ば強制的に持続させているからである。したがって,そのような活動を「サーキットモデル」の俎上に乗せて説明することは適切ではないと思われる。学校教育現場におけるスポーツや(コンクール等を伴う)文化活動を「強化」や活動成果の発信,地域貢献,地域活性化という観点からは従来の課外活動のあり方を再考すべき時期が到来しているのかもしれない。

5. 結論

以上の結果および考察から,本稿の最初で述べた森重昌之氏の指摘のようにインタムシカの活動事例を「サーキットモデル」で説明することは可能と思われる。

最初に,筆者がインタムシカの顧問に就任する以前のおよそ10年間の活動停滞・低迷の原因は前顧問がフェーズ①の「よそ者」になり得なかったことに加え,フェーズ②の「ネットワーク形成」および「翻訳」(フェーズ③からフェーズ④への移行期)の失敗であったといえるが,たとえ見かけ上サークル活動が行われていたとしても,これらの重要なフェーズが機能不全に陥っていた限り「サーキット」が回り,スパイラルに上昇することは有り得なかったと考えられる。

次に筆者の顧問就任後少なくとも最初の4年間(1999年～2002年)は,フェーズ①～フェーズ④,さらに一段階上のフェーズ①へと次々サーキットが回転・上昇していったが,「サーキットモデル」における各フェーズおよび学習コアが意味する事項とそれぞれの位置に当時のインタムシカの活動方針・内容はうまく符合している。

このような自律的・持続的な活動がその後も期待されたインタムシカであったが,特に2002年以降は言わば「守り」の姿勢に入り,それ以前に開拓し蓄積してきた「遺産」を維持・継承することに主眼が置かれ,新規の分野・演目を大規模に開拓することはほとんどなかった。このことは必ずしも「サーキット」が回らなかったことを意味しているわけではなく,見かけ上(やや消極的ではあったが)それ以前と同様に回っていたものの,新たな演目等の開拓がなされず,むしろ従来の演目で満足していたような状況下においては「サーキット」が上昇するはずもなく,現状維持もしくは失速・下降の兆しが見えつつあったといえる。従って,見かけ上は自律的・持続的に「サーキット」は回っていたが,その実態はそれぞれのフェーズや学習コアが機能不全に陥っていたとみなすことができ,その原因は特に2001年の活動〔沖野2011, pp.25-28〕にあったと考えられる。

2001年は次々と殺到する演奏依頼をこなすうちに新たな演目の開拓と練習時間の不足から「本番の演奏＝練習」という構図に陥りがちになり,また,その帰結として演目もほとんど従来のもの限定される事態に陥った。このことは前章でも指摘したように,「サーキット」のフェーズ①における(新たな)「店を開く」ことができなくなった(開く必要性を感じなくなった)ことに伴い,「現状維持＝現状に満足」という構図が生じ,単に「サーキット」を回すことができなくなった(あるいは回そうとしなかった,回す必要性を感じなくなった)という表層上の現象にとどまらず,「サーキットモデル」の根幹である「オープン性」を自ら放棄し,「内向き＝閉鎖的」になったことを意味する。「インタムシカ」という名称の意味(注:ラ

テン語で「音楽の中へ」の意)も含め、しだいに外部の人々から「いったい何をやっているのかわからないサークル¹⁰」と言われ始めたのはこの頃からであったように筆者は記憶している。さらには、そのようなサークルの在り方がその後の後輩たちに継承されたことで部員数も活動も「先細り」となり、その結果、廃部に至ったものと考えられる。

以上の点、特にインタムシカの事例から、筆者は部活動が自律的で持続可能となるための最も重要な条件は「オープン性」であると結論づけたい。この「オープン性」が「サーキットモデル」における「店を開く」や「ネットワーク形成」のみならず全てのフェーズ、学習コアにおいて必須のものであることはこれまで筆者が本稿で述べてきたインタムシカの活動の事例からも明らかであり、敷田・森重らの多くの研究成果をも支持していると思われる。したがって、仮に筆者(もしくは部員たち)が当時「サーキットモデル」の存在を知り、その意味を理解していたら、インタムシカが「オープン性」を失った瞬間にその末路の予測やその対策を講ずることも十分可能だったのではないだろうか。

「サーキットモデル」が学校教育現場における他の様々な課外活動にも適用可能と期待できることが本研究からその一端はうかがえたものの、筆者は本件以外に学校教育現場における課外活動の事例を把握しておらず、果たして「オープン性」が全ての部活動において最重要条件かどうかは現時点では判断しかねるため、インタムシカの事例をスタンダードとするには無理があり、更なる検証や事例研究が必要であると考えている。したがって、本事例研究から新たに「インタムシカのサーキットモデル」を案出・提示することは困難である。なぜなら、敷田・森重らの一連の研究成果とは異なり、結果としてその活動が歴史的に「失敗」したからである。ただし、このモデルが多く部の活動やこれから立ち上げようと模索・試行錯誤中のサークルや団体にとっていわば「反面教師」としてむしろ意義深いと評価されるならばこの限りではない。

6. あとがき

昨年、インタムシカ発足と同年に開幕し、約四半世紀の歴史に幕を閉じた「追分フェス」について、筆者の約20年来の知人で音楽家の金一健(かねいち たけし)氏が自身のブログ[金一 2013]にその「思い出」を記している。そこでは同フェスにたびたび参加したインタムシカのこととも言及しており、その部分を以下に引用させていただく。(注:《 》の囲みは筆者が加筆したものである。)

《あと、沖野さん率いるインタムシカ全盛時代。インタムシカというのは確か東海大学の民俗(筆者注:ママ, 正しくは「民族」)音楽愛好会の名前。インタムシカにはメンバーが重なりながらもたくさんのバンドが出来ており、次から次へとインタムシカ名義の似たようなメンツのバンドが出てきては沖野さんの教え子らしくヘンテコな演奏を繰り広げていました。みんなは「インタムシカばっかし(筆者注:ママ)出過ぎだよ〜」なんて不満を漏らしながらも結構楽しんでいました。そしてその中にはメガーヌ茨木くんという「枯葉」一曲で追分のスターとなった若者もいたなあ。彼は元気かな。》

¹⁰ この点については2006年の研究会(前述)において既に森重氏(前述)から指摘されていた。

以上の金一氏の評価, 特に「ヘンテコな演奏」と「結構楽しんでいました。」という箇所にこそインタムシカの音楽活動の本質がよく表現されており, 筆者自身が最も信頼する音楽家の一人である金一氏より軽妙かつ的確, 最大限の評価をいただいたものと自負している。

インタムシカは短期間で「上昇」したその瞬間, 正に「早すぎた地域貢献活動」を続けざまに行ったことも災いし, 結果として持続不可能, 消滅の運命をたどったが, まだ学生による地域貢献活動が一般的ではなかったあの時代にある程度の地域活性化の一翼を担い, また, 上記金一氏の批評に如実に表現されているように, ごく短期間ながらも観客を(音楽や芸能の最重要要素の一つである)「笑わせ, 楽しませ, 和ませ」印象づけたことは何よりも画期的であったと考えられる。また, その歴史を閉じるまで幸いにも死者や(肉体的・精神的)病人または怪我人を誰一人として出さなかったことは特筆すべきことかもしれない。

謝 辞

本稿をまとめるにあたり, 各方面・分野の多くの方々から直接的・間接的にご教示・ご指導・ご協力等をいただいた。特に本稿執筆の直接の動機を与えて下さった森重昌之氏, 「サーキットモデル」の開発者である敷田麻実氏, 共同研究会において森重氏と出会う機会を与えて下さった西山徳明氏および山村高淑氏, 共同研究会において筆者を「ジェネラリスト」と的確に評価して下さいました真板昭夫氏, インタムシカ初期の貴重な情報を提供して下さいました谷本一志氏, 水崎禎氏, 森末祐司氏, 小坂みゆき氏および小泉幸子氏, インタムシカ「上昇」の際の最大の功労者である二人の偉大なOB, 「メガーヌ茨木」こと茨木允康氏および由良一彦氏, インタムシカ後期の音楽の伝承/継承に多大な貢献をした中原瑞季氏, インタムシカを軽妙かつ鋭い批評して下さいました金一健氏, インタムシカをいつも温かい目で見守って下さった「追分フェス」主催者・小松崎健氏, また, インタムシカをファンの一人として陰ながら応援し, 白血病の再発で32歳の若さでこの世を去るまで平和研究者/シンガー・ソングライターの立場から音楽の可能性を追求し続けた故・平泉金弥氏, 平日頃から筆者をはじめインタムシカに対する鋭い批評をしているわが妻, 智子には心より深く謝意を表したい。

参考文献

金一健 (2013 現在), 「2012年8月 追分ラッキーフェスの思い出。」, 『吉田二郎随筆 日々是吉田二郎』, ウェブサイト:

<<http://blog.livedoor.jp/yoshidajiroh/archives/2012-08.html>>

沖野慎二 (2010), 「民族音楽サークル「インタムシカ」活動報告(1989-2009) — (上) 初心者が楽器を演奏するとき」, 『東海大学高等教育研究(北海道キャンパス)』 **3**, 16-28

沖野慎二 (2011), 「民族音楽サークル「インタムシカ」活動報告(1989-2009) — (下) 早すぎた地域貢献の一事例」, 『東海大学高等教育研究(北海道キャンパス)』 **4**, 22-33

敷田麻実, 森重昌之 (2003a), 「持続可能なエコツーリズムを地域で創出するためのモデルに関する研究」, 『観光研究』 **15**, 1-10

敷田麻実, 森重昌之 (2003b), 「公共事業の戦略的活用と地域の環境保全—北海道黒松内町に

- おける持続可能な地域振興と政策プロセスの検証—, 『公共事業と環境保全 (環境経済・政策学会年報)』 **8**, 121-138
- 敷田麻実, 森重昌之 (2004), 「サーキットモデルと知識残高試算表による NPO 活動の総合評価」, 『日本 NPO 学会第 6 回年次大会報告概要集』, ウェブサイト:
<http://www.cats.hokudai.ac.jp/~shikida/zisseki_pdffiles/jisseki300-349/1330-01.pdf>
- 敷田麻実, 森重昌之 (2006a), 「地域環境政策に専門家はどうかかわるか—地域自律型マネジメントとその実現を支援する専門家の関わり」, 『環境経済・政策研究の動向と展望 (環境経済・政策学会年報)』 **11**, 197-209
- 敷田麻実, 森重昌之 (2006b), 「オープンソースによる自律的観光 デザインプロセスへの観光客の参加とその促進メカニズム」, 西山徳明編『文化遺産マネジメントとツーリズムの持続的関係構築に関する研究』(『国立民族学博物館調査報告』) **61**, 243-261
- 敷田麻実 (編著), 森重昌之, 高木晴光, 宮本英樹 (著) (2008), 『地域からのエコツーリズム 観光・交流による持続可能な地域づくり』, 学芸出版社, 京都
- 敷田麻実, 末永聡 (2003), 「地域の湾岸域管理を実現するためのモデルに関する研究: 京都府網野町琴引浜のケーススタディからの提案」, 『日本沿岸域学会論文集』 **15**, 25-36
- 敷田麻実, 末永聡, 木下明 (2002), 「湾岸域管理における NPO の役割とその活動のサーキットモデル」, 『日本沿岸域学会研究討論会 2002 講演概要集』 **15**, 135-140
- 敷田麻実 (2013 現在 a), 「北海道大学観光学高等研究センター 敷田麻実の仕事 これがサーキットモデルだ 創造的仕事をするならこのモデル」, ウェブサイト:
<<http://www.cats.hokudai.ac.jp/~shikida/circuitmodel.html>>
- 敷田麻実 (2013 現在 b), 「サーキットモデルにかんする応用事例」, ウェブサイト:
<http://www.cats.hokudai.ac.jp/~shikida/circuit_model/CM_application_list_03-20070103.htm>
- 敷田麻実 (2013 現在 c), 「サーキットモデルギャラリー Ver.10.05」, ウェブサイト:
<http://www.cats.hokudai.ac.jp/~shikida/circuit_model/cm_files/cm1004/cm1004_20050505.htm>
- Skinner, B. F. (1984), “The phylogeny and ontogeny of behavior”, *The Behavioral and Brain Sciences* **7**, 669-711

(受付: 2013 年 1 月 31 日, 受理: 2013 年 3 月 13 日)